第 20 回“「障害」のある子どもの高校進学を考える学習会”報告　その 1

感動を呼び起こしたサヤカさん

昨年の総会で新さんから代表を引き継いだサヤカさんは、会場の真ん中いちばん前の席にお母さんと一緒に座っていました。ダウン症のあるサヤカさんは、会として初めて障害当事者として、しかも現役の高校生として代表を引き受けてくれました。

司会が代表挨拶を促します。ところが前に出てくれません。再度言葉を掛けると、「いやぁ！」と返します。お母さんがなにやら耳元で語りかけますが、「言えへん！」と大きな声が響きます。司会が「学習会はじめてもええかな！」と声を掛けると、「ウン！！」と一声返事が返り、開会しました。

最初に、高校を卒業した 3 人の人たちにお祝いの花束を贈呈します。一番目は、府立の工科高校を卒業したカンさんです。当日は、本人とお母さんがこだわり続けた一般就労で合格した会社の説明会がありカンさんが欠席したので、お母さんが受け取ってくれました。

次に定時制高校を卒業したサヤカさんの番です。名前を呼ぶとすっくと立ち上がって前に出ました。先ほどとの違いに会場から拍手と笑いが起こります。花束を受け取り、マイクを向けると「ありがとう！」とはっきりした声で答えました。

3 人目の定時制高校を卒業したユウタロウさんへの花束贈呈に移ろうとしたとき、いきなり「言いたいことあるねん」と、大きな声で発言しました。誰も予想しなかった言葉に、会場中の耳目がサヤカさんに集中します。「ええっ、いったい何が起こるのか」とでもいった緊張をはらんだ空気が流れます。

もう一度マイクを握ると「ママに言いたいことあるねん」。そして目の前に座っているお母さんに向かって、「ママ、だあいすき！」と言いました。

一挙に会場の緊張がほどけて、もうみんな拍手喝采。お母さんの目には大粒の涙が。席に戻ったサヤカさんはお母さんにほっぺたをギューッとくっつけて抱擁していました。

小・中学校では、どちらかといえば控えめで、同じダウン症の友だちが世話を焼いてくれるのに従っているようにも見えていたのですが、高校受験をきっかけに見違えるような元気さを見せはじめ、学年が進むごとにからだも心もグイグイと周りを軋ませるような音を立てて成長する姿を感じていました。

そしてこの日、しかも卒業祝いの場で自分から発言を求めて、お母さんに感謝の言葉を述べるという、心憎いまでの演出と積極性に舌を巻いてしまいました。

第 20 回“「障害」のある子どもの高校進学を考える学習会”の報告　つづき

今回の学習会は、4 人の障害のある子どもたちのお父さんにパネルディスカッションをしていただくことにしました。

これ、長年温めてきた企画でもあるんです。15 年以上前に金沢市の教職員のみなさんに話をさせていただく機会があったのですが、その夜地元の障害児が集う“ひまわり教室”のみなさんが交流会を開いてくださいました。びっくりしました。若いお父さんたちがいっぱい集まっておられて、会の進行を一手に引き受けています。（たぶん）「オヤジの会」が組織されていたのだと思います。

障害児教育運動は母親が担っているという、私の中の常識をひっくり返す光景でした。なるほど“ひまわり教室”の豊かな実践の背景には、これがあるのだなとひとりごちたものでした。（※いつか“ひまわり教室”について書いてみたいと思っています。）

そんな経験もあっての今回の父親のパネルディスカッションとなりました。

みなさん心に残る「いい話」を語ってくださったのですが、紙数の都合で私が印象に残ったエピソードを一つずつ載せておこうと思います。雰囲気なりとも伝わればと願って。――

▼3 歳下の妹が生まれたときに、本人が一切食事を摂らなくなってしまった。本人に聞いても、色々周りに相談しても理由が分からない。あるとき「さびしいんやわ」「さびしいって、訴えてるんとちがう」といわれて、はたと驚いてしまった。妻と相談してふたりで謝った。そのあとはすごく食べるようになった。

▼生まれてどこまで生命があるのかわからなかった。正月に家に連れて帰っていっしょに過ごし、そのまま家にいるようになった。何度も救急車を呼ぶことがあったので、それまで毎日飲酒していたのだけれど、いつでも送って行けるように酒を飲むのをやめた。以来飲んでいない。

▼妻が育児に疲れてしまったことがあって、中学になるまで「障害受容」ができなかった。自分が学校や福祉課とのやり取りもする。会社には朝の会議を 9 時からに変更してもらって、6 年間毎朝学校へ送ってから出勤した。

▼高校を卒業した後、科学クラブの学会発表でフェリーで九州に向かった。船内に大きな風呂があって、あれよあれよという間に生徒たちや先生たちが集まって、ユウタロウのからだを支えながら、頭を洗う者、からだを洗う者、足を洗う者と手分けして入浴した。お風呂にみんなでつかる姿を想像して、これがインクルーシブというもんや、と思った。――

フリートークになって、参加していた障害当事者から「ちょっときつい言い方になるかもしれへんけど」と前置きしながら、「父親と

いえども差別意識はあるだろう。自分自身が障害者といえども差別意識はあるに違いない。いつも絶えず考え続けることが必要だ」と発言がありました。

それを受けるように、パネラーからの発言。「そもそも父親が懺悔しても何も変わらないのではないか。父親だから母親だからという問題の立て方がおかしい。ジェンダーに関わりなく、衣服でも確かめるように、何か違和感を感じたときに一つひとつのことを考え続けることが大事だと思う」と。

その発言を重々理解した上で、それでもなお経験的にいえば、障害児の子育ては全国津々浦々圧倒的に母親に「任されてしまっている」。日々の子育て、障害者運動のシーンに登場する父親の姿は少ない。それが原因で夫婦間の齟齬が生まれたり、離婚に発展するケースも少なくありません。今回のパネルディスカッションが、「父親の参加」を考えるきっかけになればと、私は期待しています。